新春初詣会（深川・門前仲町）

平成２７年１月１７日（土）

ま　ほ　ろ　ば　会

はじめに

まほろば会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。まほろば会平成２７年の行事幕開けは、恒例の「新春初詣会」です。今年は、「江戸勧進相撲発祥の地」としても有名な「富岡八幡宮」をスタート地点としました。そこから「深川ゑんま堂」などを見学しながら、岩崎家三代が築いた名石の庭「清澄庭園」をゆっくりと散策します。

昼食は、昭和２９年に建てられた店舗も風情たっぷりな、馬肉料理の老舗「みの家」で、「桜なべ」を賞味しましょう。

午後は先ず、深川と言えば必ず思い出す超有名俳人「松尾芭蕉」の旧跡を見学します。元禄２年（１６８９年）３月、2,400 キロにも及ぶ「奥の細道」の壮大な旅の始まった場所です。

「草の戸も　住み替る代ぞ　ひなの家」

その後、「田川水泡のらくろ館」などを回って、今年の初詣会の「とり」は「深川江戸博物館」の自由見学としました。江戸当時の町屋の風情を味わうとともに、同時開催している企画展「相撲の歴史と本所・深川」を、ゆっくりとご覧ください。

幹事一同

冬木町
明地
冬木町
龍久町
大和町
山本町
戸田大善
松平伊豆守
松平阿波守
水野土佐守
松平下総守
柳原弾正大輔
松平肥後守
人参町
人参町

門前仲町 名前のゆかりは？

門前仲町（もんぜんなかちょう）は、東京都江東区の地名で、旧深川区にあたる深川地域内である。富岡八幡宮など著名な神社仏閣を有する富岡に隣接した門前町として古くから栄えている。商店街の活動が活発で、大通りや地下鉄、都営バスの発着所が設けられているなど深川地域を代表する要所のひとつに数えられる。通称「門仲（もんなか）」、または「深川仲町」と呼ぶこともある。江戸時代に伊能忠敬等の著名人が多く住んでいたことで知られる。

富岡八幡宮である別当永代寺（えいたいじ）の門前町として、17 世紀半ばから町屋が形成されたためこの名前となったもの。永代寺は 1868 年（明治元年）の神仏分離令で廃止された。地名改正以前は、「深川永代寺門前仲町」と呼ばれていた。1969 年住居表示を実施し、深川門前仲町から現在の門前仲町に町名変更を行った。

深川 名前のゆかりは？

深川は、東京都江東区のおよそ西半分を範囲とし、江戸・東京の下町を構成している地域のひとつである。地名の由来について、近世まではただの茅野であったが、徳川家康の入国により 1590 年（天正 18 年）から開削が進められていた小名木川の北側を、摂津国出身の深川八郎右衛門ほか 6 人が開拓し、1596 年（慶長元年）に深川村を創建したのが始まりであるといわれている。

3 代将軍徳川家光の時代から富岡八幡宮の門前町として発達し、明暦の大火ののちに木場が置かれて商業開港地域となり、深川岡場所も設置され花街となる。江戸の辰巳（方位としては「東南」）の方角にあることより、深川の芸者は「辰巳芸者」（たつみげいしゃ。巽芸者とも書く。江戸時代を中心に、江戸の深川（後の東京都江東区）で活躍した芸者のこと。深川八幡宮・永代寺の門前町は岡場所であり、遊女（私娼）と並んで「意気」と「張り」を看板にした芸者が評判となった。羽織姿が特徴的なことから「羽織芸者」とも呼ばれた。舞妓・芸妓が京の「華」なら、辰巳芸者は江戸の「いき」の象徴とたたえられた。）と呼ばれた。

深川のある「深川区」は、もとは下総国葛飾郡の内で、江戸時代初期の 1683 年（貞享 3 年）また一説によれば寛永年間（1622 年-1643 年）に、太日川（おおいがわ。現在の江戸川・旧江戸川）より西の地域を武蔵国に編入した際に武蔵国葛飾郡となる。両国橋が架けられたのちに江戸図にも載せられて江戸に組み込まれるようになり、町地が多く起立した。

材木商人として財を成した紀伊國屋文左衛門や奈良屋茂左衛門も一時邸を構える。1702 年（元禄 15 年）の大石良雄率いる赤穂浪士が吉良義央邸に討ち入った事件では、一行は富岡八幡宮の前の茶屋で最終的な打ち合わせのための会議を開いたと伝えられる。曲亭馬琴はこの地で生まれ、平賀源内や松尾芭蕉、伊能忠敬なども深川に住んだ。

1878 年、郡区町村編制法施行に伴い東京 15 区の一つとして成立した区域に名称として採用された。この深川区は、現在の江東区のうち上記江戸の町地に該当する地域である。ついで 1889 年市制町村制施行によって横十間川より西側の地域全てが深川区になる。（横十間川以東は南葛飾郡大島村に編入された。）これらはいずれも現在の江東区深川よりはるかに広い範囲である。1945 年 3 月 10 日の東京大空襲ではこの深川区に爆撃初弾が投下され、区内は焦土と化した。戦後 1947 年に城東区と合併し、現在の江東区となる。

富岡八幡宮

本堂

日本一大きな神輿

富岡八幡宮（とみおかはちまんぐう）は、東京都江東区富岡にある八幡神社。別名を「深川八幡」ともいう。建久年間に源頼朝が勧請した富岡八幡宮（横浜市金沢区富岡）の直系分社である。大相撲発祥の地。氏子区域は、江東区の深川地域中南部と中央区の日本橋箱崎町および新川である。

1624 年（寛永 4 年）、長盛法師が神託により砂州であった同地を干拓し、永代島に八幡宮を建立したことが創建とされるが、横浜市の富岡八幡宮の八幡宮明細帳（1893 年（明治 26 年））では、江戸時代初期に行なわれた深川の干拓が難航したため、波除八幡の異名をもつ富岡八幡宮を分霊したとの記録が残る。創建当時は「永代八幡」と呼ばれ、砂州の埋め立てにより 60,508 坪の社有地があった。

八幡大神を尊崇した徳川将軍家の保護を受け、庶民にも「深川の八幡様」として親しまれた。広く美麗な庭園は人気の名所であったという。なお、長盛法師は同じ地に別当寺院として「永代寺」も建立している。同社の周囲には門前町（現在の門前仲町）が形成され、干拓地が沖合いに延びるにつれ商業地としても重要視された。

明治維新後の社格は、准勅祭社とされ、同制度の廃止後は延喜式神名帳に記載がないため府社とされたが、皇室の尊崇を受け続けた。永代寺については、神仏分離令によって廃寺。現在の永代寺は、1896 年（明治 29 年）に再建されたものである。1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日の東京大空襲により焼失。1956 年（昭和 31 年）、現在の社殿が造営された。鉄筋コンクリートを使用した、「重層型準八萬造り」となっている。

＜＜大相撲との関わり＞＞

江戸勧進相撲の発祥の地としても知られ、しばしば境内で本場所も開催された。特に明治維新以降、幕府や大名家の加護を失った相撲界が、神道との関わりを強調することで生き残りをはかったためもあり、同社と相撲との結びつきが強まった。現在も新横綱誕生のおりの奉納土俵入りなどの式典が執り行われるほか、相撲にまつわる数々の石碑等が建つ（野見宿禰社・横綱力士碑・大関力士碑・巨人力士身長碑・超五十連勝力士碑など）。

深川不動堂

旧本堂

おねがい不動尊

成田山 東京別院 深川不動堂（なりたさん とうきょうべついん ふかがわふどうどう）は、真言宗智山派成田山新勝寺の東京別院。通称は深川不動尊、深川不動堂。

江戸時代のはじめ、歌舞伎役者の市川團十郎が不動明王が登場する芝居を打ったことなどにより、成田山の不動明王を拝観したいという気運が江戸っ子たちのあいだで高まった。これを受けて、元禄16年（1703年）、1回目の成田不動の「出開帳」（現代風にいえば「秘仏特別公開」）が富岡八幡宮の別当・永代寺で開かれた。これが深川不動堂の始まりである。江戸における成田不動の出開帳は安政3年（1856年）まで、江戸時代を通じて12回行われたが、そのうち1回を除いて深川永代寺が会場となった。

永代寺は明治維新後、神仏分離令により廃寺となり、旧境内は深川公園となった。しかし不動尊信仰は止むことがなく、明治11年（1878年）に現在の場所に成田不動の分霊を祀り、「深川不動堂」として存続することが東京府により認められた。境内地は、深川公園の一部を永久かつ無償で借用することが認められたものである。

明治14年（1881年）に本堂が完成。その後本堂は関東大震災・東京大空襲と二度にわたって焼失したが、本尊は焼失を免れた。永代寺は門前にあった塔頭・吉祥院が明治29年（1896年）に再興され、名跡を継いだ。

「旧本堂」は、前本堂が東京大空襲で焼失した後、千葉県本埜村（現・印西市）の龍腹寺の堂（文久3年・1863年建立）を移築して本堂としたもので、昭和25年（1950年）に移築が完了、翌年に落慶法要が営まれた。現在は丈八の「おねがい不動尊」が安置されている。

「（新）本堂」は、旧本堂の西側にある外壁に梵字（不動明王真言）を散りばめてある建物。開創310年を期に平成23年（2011年）に完成。同年4月16日の夜間に旧本堂より本尊不動明王像及び脇侍の二童子像、四大明王像を遷座し、翌17日から護摩供養は新本堂で行われている。平成24年（2012年）9月15日、新勝寺貫首によって落慶法要が営まれた。1日5回（縁日のときは6回）護摩供養が行われる。不動明王二童子像・四大明王像（五大明王から不動尊を除く）は江東区指定文化財。

「内仏殿」は、旧本堂裏手にある4階建の建物。開創300年を期に平成12年（2000年）に完成。1階には澤田政廣作の不動明王立像などの仏像、2階には四国八十八箇所の巡拝所などがあり、4階は大日如来を安置する宝蔵大日堂である。4階の天井画は中島千波の作。

深川ゑんま堂

閻魔大王

地獄絵

＜以下、ゑんま堂ホームページより抜粋＞

法乗院ゑんま堂は、寛永６年（1629 年）深川富吉町（東京・江東区）に創建され、同 18 年に現在地に移りました。開山は覚誉僧正、本山は十一面観音で有名な大和長谷寺です。 当山は、弘法大師四国八十八ヶ所霊場の写し霊場として、江戸時代中期の宝永年間(1751-64)に江戸に設けられた御府内八十八ヶ所の第 74 番目札所であり、江戸三えんま『深川ゑんま堂』として古くから人々に親しまれてきました。 江戸の時代には、当山正面に通じる道にゑんま堂橋（史跡）が架けられ、現在の清澄通りがなかった当時は、深川の中心道だったと伝えられています。

＜ゑんま堂＞

日本最大の閻魔大王座像 （全高 3.5m 全幅 4.5m 重量 1.5ｔ 寄木造り）。 平成元年 現在のゑんま座像を建立。19 のご祈願に対しお賽銭を投入すると、仏様より様々な説法を聞くことが出来るシステムを日本で初めて採用したゑんま像。おゑんま様の除けと封じの御利益は特別なものとして有名で、江戸三えんまの一つとして庶民の信頼を集めています。

＜地獄極楽絵＞

本堂一階に展示されている全 16 枚の地獄・極楽図は、天明四年（1784 年）に江戸の宋庵という絵師によって描かれた作です。この絵は、悪事を重ねることの恐ろしさ、善い行いを積むことの必要性、御仏の慈愛、命の尊さを説いています。 冥途(死者の霊魂がいく世界)では、死後の人々は閻魔大王を中心に十人の王によって裁きを受けます。十王の本来の姿は菩薩ですが、裁判中は柔和な姿を隠して憤怒の身を現し、初七日から七十七日、一周忌、三周忌に至るまで、次々に亡者を受け取りその罪業を考査し未来に生まれるところを定めます。 御仏の教えの根本理念は、因果応報にあります。悪行を積めば悪い結果に、善行はよい結果になるように、人間は生きている時の行いが全ての原因になるということなのです。

＜曽我五郎の足跡石＞

曽我五郎は、日本三大仇討ちの一つである曾我兄弟の仇討ち（そがきょうだいのあだうち）で、兄曾我十郎と共に父親の敵である工藤祐経を討ったことで知られています。また、歌舞伎「曽我物語」の主人公として、庶民の支持を受けています。足跡石は、歌舞伎に縁深い当山に移されたもので、若くして一生を父の仇に終始した曽我兄弟の五郎が老母を背負い、工藤祐経の菩提と老母父の仇の報告をした帰りに残されたものと言い伝えられています。

採茶庵（さいとあん）

芭蕉の門人鯉屋杉風（さんぷう）は、今の中央区室町１丁目付近において代々幕府の魚御用をつとめ深川芭蕉庵もその持家であったが、また平野町内の三百坪ほどの地に彩茶庵を建てみずからも彩茶庵と号した芭蕉は、しばしばこの庵に遊び「白露もこぼさぬ萩のうねりかな」の句をよんだことがあり、元禄２年「奥の細道」の旅はこの彩茶庵から出立した。

俳句の散歩道

海辺橋から西方へ次の清澄橋間の水辺の散歩道（南岸）に「芭蕉俳句の散歩道」が作られ、奥の細道の代表的な１８句が、木製ではありますが句碑として行程順に並んでおり、楽しむことが出来ます。

いくつか、句に訳をつけてみましょう―

「草の戸も 住替る代ぞひなの家」（第一日目 序章 深川にて）

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」で始まる「奥の細道」。スタートがここ深川。「雛の家」というように、芭蕉が立ち退いた後の第二次芭蕉庵には、女の子がいる家族持ちが移り住んだ。この譲受人は兵右衛門という男であった。どうも兵右衛門夫婦は年配者で、雛を飾ったのは孫のためらしい。

「行春や 鳥啼魚の目は泪」（第二日目 旅立 千住にて）

別れにあたって芭蕉の胸には、「前途三千里」の不安と惜別が去来した。長旅にはもはや慣れ尽した芭蕉ではあったが、今回は健康のこと、方角が初の東北であったことなど、不安材料が多かったのである。『奥の細道』の終着大垣では、「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」と詠んでいる。千住と大垣でそれぞれ「行く春」と「行く秋」、「舟をあがり」と「また舟にのりて」として、この集の始めと終わりを鮮やかに対照させた。なお、「行く春」も「行く秋」も流転の世界にあって永遠の別れを暗示する。

「あらたうと 青葉若葉の日の光」（第六日目 日光にて）

日光山はなんと尊いお山だろう。新緑に埋もれる木の下闇まで燦々と日の光が射している。これは弘法大師様と東照権現様のおかげだ。芭蕉の徳川政権への過度の賞賛がしばしば詮索を呼んだ句。

「野を横に 馬牽（ひき）むけよほとゝぎす」（第十二日目 殺生石 那須湯本にて）

広い那須野をホトトギスが渡ってゆく。馬方よ、駒の鼻先をホトトギスの飛び去った方角に向けよ。短冊を欲しがる風流の分かる「口付き」の男（馬子）にかける挨拶吟。

「早苗とる 手もとや昔しのぶ摺」（第十七日目 信夫もぢ摺り 那須にて）

稲の苗を扱う早乙女たちの手許の風情も古代めいて見える陸奥の田植風景。その昔、もじ摺り（信夫群でとれた忍草の茎や葉の色素で、ねじれたような模様の摺絹を作った。）を摺る乙女たちの手さばきが忍ばれることだ。

「桜より 松は二木を三月越し」（第二十一日目 武隈 岩沼にて）

武隈の松は、今は相生の二本の松で、私を今日まで三か月越しで待っていてくれました。そしていま私も、三月越しに松を見ました。挙白に対する答礼の句。掛詞で埋まっている。

「夏草や 兵どもが夢の跡」（第二十九日目 平泉にて）

夏草繁るここ高舘の城跡に立ってはるか昔を偲んでいる。奥州藤原三代の栄耀も、義経主従の軍馬のいななきもこの夏草の中に埋もれて、その歴史的時間はさながら一睡の夢のようだ。

「五月雨の 降のこしてや光堂」（同）

五百年も五月雨に濡れても、光堂だけは朽ち果てさせることが出来なかった。また別に、あまりに美しい光堂は、暗い五月雨の中にも燦然と輝いて、ここだけぽっかり雨が降り残しているかのように明るい、という解釈もある。ただし、当日の天気は「明」（晴）であった。

「五月雨を あつめて早し最上川」（第三十三日目 最上川 大石田にて）

この句は、５月２９日夜、大石田の船宿経営高野平左衛門（一栄）方にて行われた句会の冒頭の発句「五月雨をあつめて涼し最上川」がその時に詠んだ句が元のである。一栄や土地への挨拶吟。これはまた随分素直な句だが、「涼し」一語を「早し」と変えただけで、怒涛渦巻く最上川に変わるから言葉の持つ威力は物凄い。

「象潟（きさがた）や 雨に西施がねぶの花」（第三十七日目 象潟にて）

「西施」は越王勾踐の愛妾。越王勾踐が絶世の美女西施の美しさにおぼれ、これが国の存亡の危機になるのではないかと考えた臣下の范蠡は、一計を案じて彼女を敵国の呉王夫差に与えてしまった。案の定、呉王は彼女に耽溺し、たちまち国は乱れた。その機に乗じて越は呉を攻めて陥落させ、西施は取り戻された。しかし、彼女がいると国難のもととなるであろうと考えた范蠡は西施を暗殺し、水に沈めてしまう。美しいためばかりに翻弄された西施の悲劇である。さて、この句、松島は男性的、象潟は女性的。その女性の代表として運命に翻弄された、合歓の花のように美しい西施がいる。

「わせの香や 分入右は有磯海」（第四十日目 那谷（なご）の浦 倶利伽羅峠にて）

有磯海は「富山湾」で歌枕。旧暦７月中旬ともなれば、すでにここ早場米地帯の米は穂が出て豊作を知らせていたはず。その野面に有磯海が広がる。ただし、芭蕉一行はこれを「右に見る」道を辿って一路金沢目指して歩いてゆく。

「石山の 石より白し秋の風」（第四十三日目 那谷（なた）小松にて）

那谷の秋は、ここ白山の白い石よりもっと澄明な白い秋だ。風水から、秋の色彩は古来、白銀の白と決まっている。

「山中や 菊はたおらぬ湯の匂」（第四十四日目 山中にて）

謡曲「菊慈童」に、周の国の慈童が菊の露を飲んで不老長寿を得たという話を題材にして、薬効のある山中温泉のお湯ならば、菊の露など飲まなくても七百年の不老長寿が得られるに違いないと、宿屋の主人久米之助への挨拶吟。

「名月や 北国日和定なき」（第四十八日目 敦賀にて）

中秋の名月といえば、秋雨前線の発達する時期でもある。宿の主に聞かずともこの時期、北陸地方はいたって空模様の変わりやすい季節なのだ。

「寂しさや 須磨にかちたる浜の秋」（第四十九日目 色（種 いろ）の浜にて）

寂しさを比べて、勝った・負けたというのは面白い。秋の寂しさは「源氏物語の須磨」によって極致とされる。種の浜の秋はそれに勝る寂しさだろうから、ここの秋が日本一の寂しさ、ということになる。

「蛤の ふたみにわかれ行秋ぞ」（第五十日目 大垣にて）

深まりゆく秋、ハマグリの殻と身とを二つに引き裂くように、また再び悲しい別れの時が来た。「ふたみ」には、旅の目的地である伊勢の「二見が浦」が読み込まれてもいる。

清澄庭園

涼亭

諸国の名石

清澄庭園（きよすみていえん）は、東京都江東区清澄にある都立庭園。池の周囲に築山や名石を配置した回遊式林泉庭園で、東京都指定名勝に指定されている。この地には元禄期の豪商・紀伊國屋文左衛門の屋敷があったと伝えられる。享保年間には下総関宿藩主・久世氏の下屋敷となり、ある程度の庭園が築かれたと推定されている。

1878年（明治11年）、荒廃していた邸地を三菱財閥創業者の岩崎弥太郎が買い取り、三菱社員の慰安と賓客接待を目的とした庭園の造成に着手。1880年（明治13年）に竣工し、深川親睦園と命名された。三菱社長の座を継いだ岩崎弥之助は庭園の泉水に隅田川の水を引き込むなど大きく手を加え、1891年（明治24年）に回遊式築山林泉庭園としての完成を見た。なお、1889年（明治22年）には庭園の西側にジョサイア・コンドル設計による洋館が建てられている。

その後、1923年（大正12年）に発生した関東大震災で庭園は大きな被害を受けて邸宅も焼失したが、図らずも近隣住民の避難場所となり多くの人命が救われた。それを受けて1924年（大正13年）、三菱3代目社長の岩崎久弥は当時の東京市に庭園の東半分を公園用地として寄贈。市は大正記念館の移築（1929年5月竣工）や深川図書館の新館舎建設（同年6月竣工）など整備を進め、1932年（昭和7年）7月24日に「清澄庭園」として開園した。1973年（昭和48年）に東京都は残る西半分の敷地を購入。翌年から整備を開始し、1977年（昭和52年）に開放公園（清澄公園）として追加開園した。開園面積は81,091.27㎡（約24,600坪）。

中島を持つ広い池が中心にあり、ツツジとサツキの植えられた「つつじ山」や池の端を歩けるように石を配置した「磯渡り」などがある。また、園内には岩崎家が全国から集めたという名石が無数に置かれている。また池には人に慣れた多数のカメがいて、餌をあげたりと楽しめる。

大正記念館は、大正天皇の葬儀に用いられた葬場殿。戦災で失われ、貞明皇后の葬場殿の材料を使って1953年（昭和28年）再建された。涼亭は、1909年（明治42年）に建てられた数寄屋造りの建物。保岡勝也の設計。東京都選定歴史的建造物に選定されている。

みの家

きょうはもう初めっからそのつもりだった。さくら鍋と馬刺しで一杯。もう言うことはない。とにかく、たそがれを待てばよい。やがて宵闇も迫れば、ポッと看板に灯が入り———、ここ深川は森下あたり。その一隅。すでにこの地に四代と、まこと由緒ある馬肉料理の老舗“みの家”は言わずと知れた庶民の店なのだ。

さくら肉はあくまで新鮮なのである！新鮮だからさくら色なのである！で、とにかく結構な宵のひととき。

（新東京百景「下駄の向くまま」より　　下町作家　滝田ゆう）

江東区芭蕉記念館

芭蕉記念館入口

三階展示室

江東区深川と言えば切っても切れない縁があるのは松尾芭蕉。世界に誇る短詩型文学ー俳句の聖者と仰がれる人が庵を結び、「古池や蛙とびこむ水の音」をはじめ多くの名句を生み、「奥の細道」など優れた紀行文をつくる出発点となったのは深川の地である。都営新宿線または大江戸線の森下駅で降りて徒歩７分、倉庫や商店の並びに古風な冠木門。入ると右手が芭蕉記念館。小さな建物だが、流れや池、小さな滝、築山もある純和風庭園を従えて、芭蕉が句に詠んださまざまな植物が植えられているひっそりした侘びの館。この草庵は、門人から贈られた芭蕉の株が生い茂ったところから「芭蕉庵」と呼ばれ、芭蕉没後、武家屋敷内に取り込まれて保存されたが、幕末から明治にかけて消失した。

入館すると２、３階の展示室に上がる。ほの暗い落ち着いた雰囲気のなかで、数々の芭蕉の肖像画が見られる。門人、弟子や芭蕉を慕う後世の人々が描いたもの。侘び、寂びを愛し、体もあまり丈夫でなかったと言われる芭蕉の風貌は意外にたくましく、大きな鼻と鋭い眼光が、どの絵でも共通している。

伊賀上野（現在の三重県）の藤堂藩の台所用人だった芭蕉は、早くから俳句で頭角を現し、1675年、32 歳のとき江戸へ出てくる。日本橋近くに住みながら俳句の師匠となり、有名になっていくが、1680 年に、まだ当時は新開地だった深川の庵に移る。弟子で幕府御用達の鮮魚商、杉山杉風が持っていた生け簀の番小屋を庵にした。

当時、江戸の俳句界で名声を得ていたのに、なぜそんな侘び住まいに移ったのか、諸説がある。多くの弟子を抱え講師料を稼ぐことばかりに夢中な宗匠たちとの競争に嫌気がさしたのだとか、純粋な芸術境を求めて隅田川と小名木川の合流点に近い花見と月見の名所にあこがれたのだとか、いや愛人だった女弟子の寿貞を郷里から連れてきた甥の桃印に奪われ駆け落ちされた失意の結果だとか。

＜庭園＞

芭蕉の句に詠まれた草木を植え、池を配した日本庭園。築山には、芭蕉庵を模したほこらと、句碑や投句箱がある。築山にある句は―

・ふる池や蛙飛こむ水の音（貞享３年（1686 年）吟）

・川上とこの川下や月の友（元禄６年（1693 年）吟）

芭蕉庵史跡展望庭園

展望庭園の芭蕉像

隅田川にかかる新大橋を望む

史跡庭園は、隅田川と小名木川に隣接し、四季折々の水辺の風景が楽しめる。庭内には、芭蕉翁像や芭蕉庵のレリーフを配し、往時を偲ぶことが出来る。

芭蕉稲荷神社

稲荷神社

史跡芭蕉庵碑

大正６年（1917 年）９月の台風の高潮の後、「芭蕉遺愛の石の蛙」（伝）が出土し、地元では「芭蕉稲荷神社」として祀っている。

＜以下、芭蕉遺蹟保存会掲示より＞

俳聖芭蕉は、杉山杉風に草庵の提供を受け、深川芭蕉庵と称して延宝八年から元禄七年大阪で病没するまでここを本拠とし「古池や蛙飛びこむ水の音」等の名吟の数々を残し、またここより全国の旅に出て有名な「奥の細道」等の紀行文を著した。

ところが芭蕉没後、この深川芭蕉庵は武家屋敷となり幕末、明治にかけて滅失してしまった。

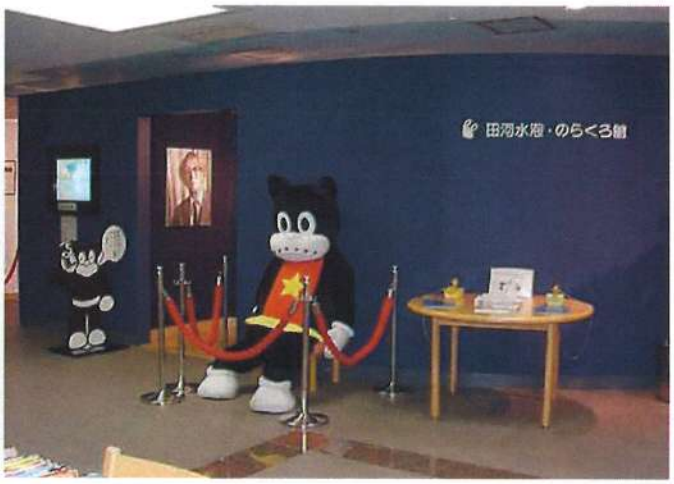
たまたま大正六年津波来襲のあと芭蕉が愛好したといわれる石造の蛙が発見され、故飯田源太郎氏等地元の人々の尽力によりここに芭蕉稲荷を祀り、同十年東京府は常盤一丁目を旧跡に指定した。

昭和二十年戦災のため当所が荒廃し、地元の芭蕉遺蹟保存会が昭和三十年復旧に尽した。

しかし、当所が狭隘であるので常盤北方の地に旧跡を移転し江東区において芭蕉記念館を建設した。

田川水泡のらくろ館

江東区森下文化センター



のらくろ館入口

漫画「のらくろ」の作者・田河水泡（本名：高見澤仲太郎）は、幼年期から青年期までを江東区で過ごした江東区ゆかりの漫画家。１９９８年、遺族から作品や書斎机などの遺品が江東区に寄贈された。これを機会に日本の漫画界に大きな足跡を残した田河水泡の業績を紹介し、末永く後世に伝えるため、「田河水泡・のらくろ館」を、彼が生涯愛し、その作品にも大きな影響を及ぼしたこの地に開設した。

霊巌寺

本堂

松平定信墓所

霊巌寺（れいがんじ）は、東京都江東区にある浄土宗の寺院。山号は道本山。院号は東海院。本尊は阿弥陀如来。寛永元年（1624 年）、雄誉霊巌上人の開山により、日本橋付近の芦原を埋め立てた霊巌島（現在の東京都中央区新川）に創建された。数年後に檀林が設置され、関東十八檀林の一つとなった。

明暦 3 年（1657 年）、江戸の大半を焼失した明暦の大火により霊巌寺も延焼。境内や周辺で 1 万人近くの避難民が犠牲になったという。万治元年（1658 年）に徳川幕府の防火対策を重視した都市改造計画の一環として、現在地に移転した。幕末江戸の 7 大火葬場（荼毘所）のひとつ、境内除地に火屋があり火葬執行の責任者が置かれていた。

霊巌寺には、11 代将軍徳川家斉のもとで老中首座として寛政の改革を行った「松平定信の墓」をはじめ、今治藩主松平家や膳所藩主本多家など大名の墓が多く存在する。また、境内には「江戸六地蔵の第五番」が安置されている。

＜松平定信の墓（国史跡）＞

陸奥白河藩の第3代藩主で、寛政の改革を行った松平定信の墓。霊巌寺周辺の地名である白河は、定信に由来する。寛政の改革（かんせいのかいかく）は、江戸時代に松平定信が老中在任期間中の1787年から1793年に主導して行われた幕政改革である。享保の改革、天保の改革とあわせて三大改革と並称される。

浅間山噴火から東北地方を中心とした天明の大飢饉などで一揆や打ちこわしが続発し、その他にも役人の賄賂などがあったため、前任者の田沼意次は失脚する。このとき、定信は幕府の重臣に金品を送りつけ、田沼意次の失脚を図り、田沼の重商主義政策が、大店による独占市場を生み出し、農業及び工業の生産基盤を否定かつ破壊する政策である事を幕府にアピールしたともされる。

松平定信は8代将軍徳川吉宗の孫にあたる（父は吉宗の次男・田安宗武、第9代将軍徳川家重の弟）。定信は白河藩主として飢饉対策に成功した経験を買われて幕府老中となり、11代将軍徳川家斉のもとで老中首座となる。

定信は吉宗の享保の改革を理想とした緊縮財政、風紀取締りによる幕府財政の安定化を目指した。また、一連の改革は田沼が推進した重商主義（商業重視）政策とは異なる。蘭学の否定や身分制度改定も並行して行われた。だが、人足寄場の設置など新規の政策も多く試みられた。

改革は6年余りに及ぶが、役人だけでなく庶民にまで倹約を強要したことや、極端な思想統制令により、経済・文化は停滞したこと、さらに「隠密の後ろにさらに隠密を付ける」と言われた定信の神経質で疑り深い気性などにより、財政の安定化においても、独占市場の解消においてもさほどの成果をあげる事は無かった。その一方で、農民層が江戸幕府の存立を脅かす存在へと拡大していく弊害があったとも指摘されている。結果として、将軍家斉とその実父徳川治済の信頼の低下や幕閣内での対立、庶民の反発によって定信は失脚することになった。

しかし定信が失脚した後も松平信明など寛政の遺老達により、この改革の方針は以後の幕政にも引き継がれることになった。

＜銅造地蔵菩薩坐像（東京都指定有形文化財（彫刻））＞

享保2年（1717年）に造られた、江戸六地蔵の5番目。像の高さは2．7メートル。深川の地蔵坊正元が発願し、江戸市中から多くの賛同者を得て建立されたものである。制作者は神田鍋町の鋳物師太田駿河守正義。蓮台には数ヶ所湯の廻らなかったところがあり、造立銘文はこれを避けて刻まれている。また、顔や肩などには金箔が残っている。

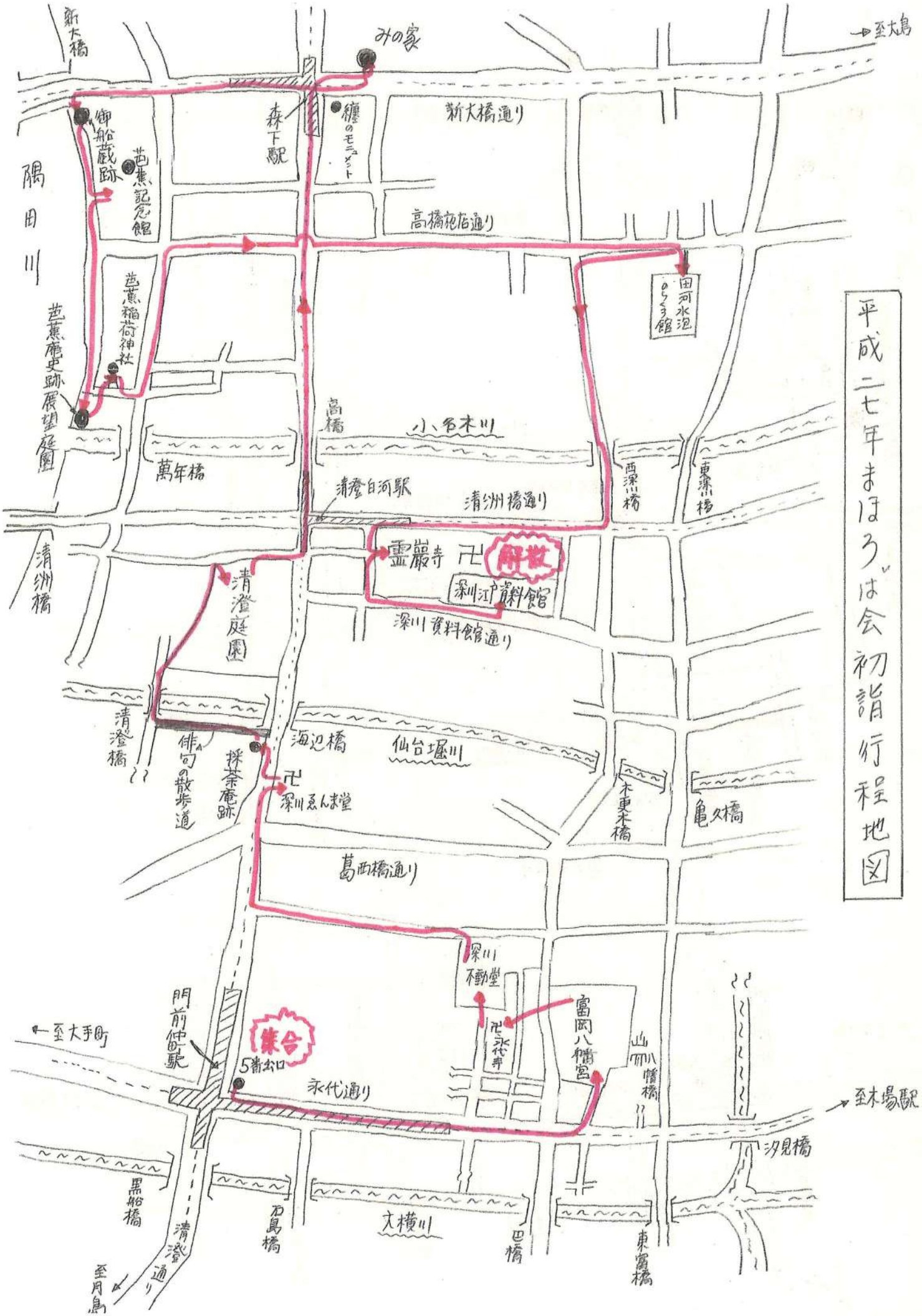
深川江戸資料館

資料館入口

江戸町屋の風景（再現）

「導入展示室」では、松平定信や鶴屋南北等、深川ゆかりの人物と深川の歴史を紹介している。

「常設展示室」では、江戸時代末（天保年間）の深川佐賀町の町並みを実物大で再現している。一日の移り変わりを音と光で演出し、季節ごとに展示内容を変えている。

「企画展示室」では、現在「相撲の歴史と本所・深川」を催している。

平成二七年まほろば会初詣行程地図